

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.63（2019年7月号）◆

今年度も早いもので半年を過ぎ、梅雨明けの報が待ち遠しい時期となりました、会員の皆様はお変わりなくお過ごしでしょうか。『Intelligence』編集部も、次号の準備を進めております。ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。また、20世紀メディア研究会は7月20日に予定されています。こちらにも是非ご参加下さい。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは、すでに第32回を重ねており、最新号には大宅壮一文庫の鴨志田浩さんがご寄稿下さいました。他にも多くの方から研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。 <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第128回研究会】（6月29日（土）14時30分～17時30分）

・福島幸宏（東京大学大学院情報学環特任准教授）

「占領期京都の公共メディアー図書館・書店に焦点をあてて」は、メディア史・図書館史・戦後京都史のはざまで、図書館史、博物館史を都市京都に焦点をあてて再構築する一つの試みとして、非戦災都市、書籍が集積する街としての「占領期京都の特殊性」について、また、文化運動が展開し、再出発を果たした京都の図書館のあり方、多様な図書館・書店が展開したことから「公共メディアとしての図書館・書店」のあり方について考察した。

・谷合佳代子（エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）館長）

「社会労働運動アーカイブズと研究者の協力が生むもの -エル・ライブラリーの実践-」
大阪・北浜にあるエル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）は、労働と社会運動にまつわる資料に特化した専門図書館である。開館の契機は、「大阪府労働情報総合プラザ」が府の財政再建策により閉鎖されたことであった。館長の谷合氏は、活動の継続に努めるべく、多くのボランティアスタッフとの協働により同ライブラリーが成立していること、また組合旗をはじめとする貴重なエフェメラ資料の紹介を中心にお話された。資料の散逸を防ぐための努力やその公開と活用は、研究者とアーキビストが互いに知見を交わしながら展開されていく必要が不可欠な点にも述べられ、広く人文科学の研究に関わる参加者にとって興味深いご発表をいただいた。

●7月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、7月20日(土)、9月28日(土)、10月19日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務局 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム】消えた風景の痕跡について

『麻雀放浪記』で知られる作家の阿佐田哲也は、その冒頭に「諸君の多くはお忘れだろうが、試みに東京の舗装道路をひっくり返してみれば、その下には確実に焦土が隠されている」と記している。同作の執筆が始まった年は1969年、日本社会から「戦後」の記憶が徐々に薄れ、やがては「ジャパン・アズ・ナンバーワン」(エズラ・ボージェル)と謳われるまでの経済繁栄を迎えようとしていた時期のことだった。それからはるかに時を経て、世紀も変わった2010年前後に私は日本占領期の歴史を調べるようになったが、それは「隠された焦土」の痕跡をたどる作業でもあったように思う。それなりの勘は持てるようになったかどうかと想像していたところ、まだその域は先だということを実感する出来事に遭遇した。

「土曜日に、東京に残る占領期関連の場所をたどるフィールド・トリップを行います」とのメールをアメリカ人の歴史研究者より受け取り、その行路を見たときは既知の場所だと思いきな気楽な気持ちで参加した。参加者は中国からの留学生を含む数人で、マッカーサーが事務室を置いた第一生命ビルの前に集合し、これから日比谷公園を抜けて皇居前広場(血のメーデー)、東京宝塚(旧アーニー・パイル)劇場、ニュー新橋ビル(闇市)、代々木公園(ワシントンハイツ)、そして六本木の星条旗新聞社まで行ってみましょうと言う。

最初の日比谷公園に向かったところで早くも知らない事物に出くわした。同公園にはアメリカ建国の象徴でもある「自由の鐘 Liberty Bell」のレプリカが置かれており、それは占領集結の年に連合軍を通じて寄贈されたものだという。毎日正午にその音を響かせているとの説明を読み、なぜ自分はこの鐘の存在はおろか、音にも気がつかなかったのだろうと愕然とした。皇居前広場へ向かい、ライフ誌上に掲載された「血のメーデー」報道写真の現場はどこだろうと尋ねられても、なかなか特定できない。10年近く研究してきたとはいえ、それはあくまでも書籍上の知識だったということを感じさせられた。

「歴史の研究に関わる人は、そんなことの繰り返しですよ。そういえば僕も、アーニー・パイルが具体的にどんな功績を残した人物か知らないなあ」、長い足で闊歩しながら同行の先生は宝塚劇場に向かいながら検索する。軍属のジャーナリストで、沖縄戦にて亡くなった人物だということはこの道すがらに始めて知ることになった。

しかし、もっとも衝撃的だったことは代々木公園の中に残された「一四烈士自刃の碑」という、敗戦の10日後に集団自決を行った右翼思想団体の慰霊碑の存在だった。この碑を探し当てる前に、白い壁にペパーミントグリーンの窓枠が可愛らしい、旧ワシントンハイツの住居を見ていただけに、その異様さは心に重く残った。「隠された焦土」を探し当てるために、舗装道路をはがすような難行はもしかしたら必要ないのかもしれない。そんなことを新鮮な気持ちで教えられた経験だった。[7月14日付 文責：鈴木貴宇]

